三刀屋高校だより

蒼雲

第141号
令和5年
10月20日発行

【発行】
島根県立三刀屋高等学校
〒690-2404
雲南市三刀屋町三刀屋 912-2
TEL：0854-45-2721
FAX：0854-45-5630

『輿望（よぼう）を担う』
～ここにあること・ここにいること～

校長　本間　達也

今年度も半年が過ぎ、やっと朝夕涼しい風を感じる季節となりました。保護者の皆様、地域の皆様には、日頃から本校の教育活動全般にわたりご理解とご協力をいただきありがとうございます。

今年5月8日以降の新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、部活動の大会や学園祭などの教育活動がコロナ禍前の状態に戻しての実施となってきました。これまでは聞こえてこなかった生徒の皆さんの歓声やマスクでうかがい知れなかった表情に接するたび、本来の学校生活が戻ってきたことを実感するとともに私たち教職員も日々元気をもらっています。お届けする三刀屋高校だより『蒼雲』で生徒の皆さんの生き生きとした活動の様子や成果を皆様にご報告できることを嬉しく思います。

さて、三刀屋高校は1924（大正13）年4月17日、県内5番目の旧制中学校としてこの地に開校し、来年記念すべき開校100周年を迎えます。本校が開校するまで島根県には松江、浜田、杵築（大社）、大田にしか旧制中学校はありませんでした。雲南地域の学生が、現在の大学にあたる高等教育を受けるためには、これらの地域にある旧制中学校に進学しなければなりませんでした。なかには、学費の捻出が困難なため志半ばで学業をあきらめざるを得ない方もいらっしゃったと聞いています。そのような状況を打開し雲南地域の学生にも高等教育の道を拓くべく尽力されたのが、地元の藤原 薫氏、松尾清三郎氏、田部長右衛門家第21代当主長秋氏の3名の方です。藤原氏は医師として「近代日本医学の父」といわれた北里柴三郎氏のもとで結核菌との闘いに研究を重ねたのち、郷里に帰り医院を開業されました。その後県会議員となり中学校設置の要請運動を国や県に対して熱心に行われました。郡会議員であった松尾氏は中学校の敷地及び校舎の建築費が地元負担となるに及んで自らの土地を敷地として提供されました。この地はのちに「三刀屋が丘」と称され、以来現在まで三刀屋高校の校舎はここにあります。県会議員や貴族院議員などを務めた田部氏は、雲南地域の文化向上を旗印にした中学校設置に大いに賛同され、経済的援助にも力を惜しまなかった方です。中学校設立にあたっては費用のほぼ三分の一に相当する寄付をされました。

本校開校以前の4つの中学校がいずれもかつての城下町、門前町、天領に位置する学校であるのに対し、本校は前述の3名の方をはじめとする地域住民による熱心な設置要請運動の結果開校した学校であり、まさに地域の輿望を担った学校ということができます。本校開校により雲南地域から上級学校進学への道が拓かれ、進路選択の可能性が大きく広がるとともに、雲南地域の発展に大きく寄与することとなりました。

1948（昭和23）年の学制改革により島根県立三刀屋高等学校と改称されて以来、本校は約17,000名の卒業生を社会に送り出してきました。今年は、普通科から総合学科に改編され20年目となる節目の年でもあります。本校の使命（スクール・ミッション）は「総合学科の特長を生かした多様な進路希望に対応したカリキュラムやキャリア教育と、地域と連携・協働した探究学習を通して、確かな学力と社会貢献力を持った未来を創造できる人材を育成する。」です。総合学科である本校の強みの一つは「多様性」だと考えています。総合学科ならではの多様な設定科目、就職から進学までの多様な進路選択、そして文科系・体育系あわせて28の多様な部活動・同好会。「多様性」は選択肢の多さに直結し、生徒の皆さん一人一人の可能性の広がりに繋がっていきます。しかし、開校までの歴史を踏まえると、この地に三刀屋高校があること、そのこと自体が多くの可能性を秘めた生徒の皆さんのチャレンジを後押しできる教育環境といえます。

学園祭での取組や部活動等での活躍には、保護者の皆様、地域の皆様からたくさんの激励の言葉をいただきました。皆様から大きな期待を寄せていただいていると感じるとともに、日々勉学に励み熱心に課外活動に取り組んでいる生徒の皆さんの、そのひたむきな姿、若い力が地域全体に勇気や元気を与える存在になっているとも感じています。

三刀屋高校が「ここにあること」、生徒の皆さんが「ここにいること」の意義を見つめ直し、100年前の先人の思い―雲南地域の学生の限りない可能性を将来につないでいきたい―に応えられるよう教育活動に取り組んでまいりたいと思います。

＊輿望（よぼう）…世間一般の人々から寄せられる信頼・期待。衆望。

島根県立三刀屋中学校（昭和10年撮影）
写真上 正面玄関周辺／写真下 本校校舎後方より撮影
（手前右側寄宿舎その先方に講堂、本館等があった。）

三高祭を終えて

生徒会長　古藤敬吾

三高祭が終わり、三刀屋高校の百回目の夏が終わりました。今年の三高祭はコロナウイルスの制限も緩和され、高校生活3年間の中で最も盛り上がり、思う存分に楽しめたのではないでしょうか。そのような素晴らしい三高祭を作り上げることができたのは、団結力があったからです。準備期間中、学校を回ってみると、合唱の歌について話し合う1年生の姿や、責任者を中心にまとまった2年生の姿。3年生は最後の夏にかける思いで一つにまとまり、様々なところで団結力を見ることができました。

いろいろなところで団結力が見られる中、我々生徒会はまとまりのない、最悪のスタートを切ってしまいました。それに気づいた生徒会担当の多賀先生のお言葉をいただき、ようやく生徒会は本当のスタートを切りました。そのため、ギリギリで準備を終えて本番を迎えることになりました。

本番は、私が想像していたよりも百倍すばらしいものになりました。これは、先生・生徒・保護者の皆さま、地域の皆さまなど多くの人々の協力があったからこそだと感じることができました。

高校最大のイベントを成功させた勢いで、いよいよ百周年を迎えることになります。三高祭に関わってくださったすべての人に心から感謝します。本当にありがとうございました。

紫組団長　永瀬一稀

色長としての思い出は二つある。まず一つは色長４人で仮装して行った選手宣誓だ。それぞれが適役のキャラクターを演じ、笑いの中にも真面目さもあり、最高の選手宣誓だった。これからスパイファミリーを見るたびに、このときのことを思い出すと思う。二つ目は、色長としてみんなをまとめたことだ。最初は何をどうすればいいのか分からないことばかりだったけれど、クラスのみんなでたくさんアイデアを出し合って、クラス動画もダンスも衣装もデコも、紫組なりの工夫と頑張りを見せることができた。みんなで一つのものを作り上げる過程は大変だったけれど、とても楽しい時間だった。１年生、２年生もすばらしい頑張りを見せてくれたことで、さらに団結力も増し、盛り上がりにつながったと思う。紫組スローガン「獅紫（子）奮迅」のように、皆が奮い立って一喜一憂し、最後まで暴れ回り、大健闘した体育祭だった。最後まで全速力で突っ走ることができ、高校生活最高の思い出の一つになった。紫組最高！

黄組団長　渡部遙斗

今年の黄組のテーマは「黄間限定」でした。言葉通り期間が限定された中で、各クラス・各パートがほかより優れた合唱や展示、衣装、デコ、ダンスなどを作ろうと頑張ってくれました。３年生にとっては最後の三高祭ということもあって、準備期間から一生懸命取り組みました。各パート長に進め方を任せていましたが、それぞれ各パート長を中心に頑張ってくれたので、それぞれ良い作品になったと思います。思わぬハプニングもありましたが、それでも全員で協力してトラブルやハプニングを乗り越えることができました。

今年はコロナウイルスによる制約もなくなり、すべての日程においてとても盛り上がりました。特に声を出してのステージ発表は楽しかったです。体育祭では二年ぶりに全競技ができて、応援の熱もすごかったです。

この三高祭実施に当たり、企画・運営・準備をしてくださった先生方、生徒会のみんな、本当にありがとうございました。三年間で一番楽しい三高祭になりました！

青組団長　國分　泰

青組はテーマである「青藍氷水」の下、全学年で一致団結して優勝することができました。元々スローガンを決めるときに、青を連想させるものを選ぼうと思い、すべての文字に青のイメージがある「青藍氷水」というスローガンに決めました。デコレーション、衣装、パフォーマンスなど全てこのスローガンに合うように考え、三つの部門で一位を獲得することができました。

パフォーマスンスではダンス部がいない中で１・２年生を束ね、ダンスを教えることは大変でした。ですが全部通して踊れたときには、達成感を感じました。デコレーションでは、演劇部の大会のため主力メンバーを欠いており、進度が遅く間に合うか不安でした。が、全員で協力することでなんとか間に合わせることができました。衣装では、女子はセーラー服を一から作り、男子は袴にスローガンを書くなど、個性を出すことに成功したと思います。準備期間中、悩んで考えたぶんだけ良い結果につながり、最高の思い出になりました。

赤組団長　髙野颯太

今年の赤組は「気炎万丈～赤って百色あんねん」でした。このテーマのように三高祭では赤組のみんなが熱く燃え上がり、盛り上がって楽しい三高祭になりました。

準備期間は、みんなで話し合い、よりよいパフォーマンスができるようにいろいろな工夫を重ねていきました。短い期間でダンスを考えて、覚えて、教えるということはとても難しく苦労しましたが、クラスの皆で協力し合い、１・２年生も一生懸命聞いてくれたので、とてもやりがいがありました。体育祭前日までハプニングもありましたが、本番では良いパフォーマンスができたと思います。

この期間でクラスの絆がより深まりとても楽しかったです。これからは大きな行事はありませんが、絆の深まったメンバーと残りの学校生活を楽しんでいきたいです。みんなが成長できた最高の三高祭となりました。

バレーボール部

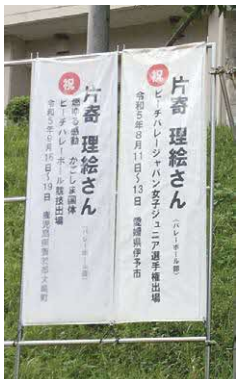
ビーチバレーボール競技　国体出場

3年　片寄理絵

私は８月に愛媛県で行われたマドンナカップと、９月に鹿児島県で行われた鹿児島国体に島根県代表として出場しました。マドンナカップではベスト16、鹿児島国体では２回戦敗退と悔しい結果でした。特に鹿児島国体の２回戦の対戦相手は、マドンナカップでフルセットまでいき、最後に逆転負けをした三重県との対戦でしたので、私たちにとってはリベンジマッチであり、目標である日本一を目指す上で必ず倒しておきたい相手でした。

当日は、強い気持ちを胸に試合に臨みました。しかし、序盤から自分たちのペースをつかむことができず、13対21、20対22の０－２で試合が終わりました。相手チームの強化されたレシーブに対応することも、相手の攻撃に対応することもできませんでした。しかし、今回の大会では、自分たちが勝負強さを発揮できたのではないかと思います。攻めるところは攻め、相手の隙を狙い、常に相手をどう動かすかを考えながらプレーができたと思います。２回戦敗退という結果ではありましたが、自分自身では納得のいく試合ができました。

強化合宿や遠征などで県外のチームとの練習試合も多く、時間を守ることや周りを気遣うといった行動をすること、人間性を磨くことの大切さを学びました。またビーチバレーボールを通していろいろな県の方々と交流もしました。交流をすることにより、試合後に何がだめだったかを共有することができ、自分たちでは気づけなかった課題を見つけることができました。県など関係なくお互いのプレースキルを高めることができるところがビーチバレーボールの良いところだと思いました。今まで暑い中一緒に練習をしてきた仲間や練習環境を良くするために行動してくださったスタッフの方々、応援してくださった方々のおかげで充実した期間を過ごすことができました。応援ありがとうございました。



男子ソフトボール部

主将　佐倉佑綺

私たち男子ソフトボール部は、6月に浜山球場で行われた県総体で安来高校に6－5で勝利し、8月5日～8日に北海道石狩市で行われたインターハイに出場しました。4月に行われた県大会では、0－8でコールド負けという結果でした。県総体まであと2か月という中でさらに高いレベルでの意識改革を行い、県外遠征や練習試合では結果はもちろん、ゲームの内容まで細かく振り返り、ミーティングを重ねました。ミーティングで出た課題を改善・克服するため練習に取り組み、部員同士のコミュニケーションも大切にしました。6月の県総体では、相手に先制され、最終回まで2－5で負けている苦しい展開でしたが、3年生を中心とした粘り強さと勝負強さを発揮することができ、3点差を逆転して勝利することができました。

インターハイでは2回戦で沖縄県代表の読谷高等学校と対戦しました。九州大会で3位、3月に行われた全国選抜大会ベスト16という強豪校でしたが、アグレッシブにチャレンジャーとして戦おうとチームで決めていました。序盤は互いにチャンスがありながらも得点を許さず、迎えた4回表に2アウトランナー2塁から9番岩橋のセンターへのタイムリーヒットで先制しました。その裏に相手の犠牲フライで同点にされましたが、5回表に2アウトランナーなしから3番宇田川のセンターオーバーのホームランで勝ち越し、この1点をバッテリーの安部・後藤を中心に全員で守り切り、2－1で勝利することができました。3回戦では、神奈川県代表の光明学園相模原高校に0－10でコールド負けしてしまいました。結果は目標としていた島根県代表としての最高の全国ベスト16と並ぶことはできましたが、全国ベスト8へは力が及びませんでした。

チームとして一緒に頑張った部員とサポートしてくださった保護者や指導者、応援していただいた地域の方々のおかげで3年間とても充実した活動をさせていただき、インターハイという最高の舞台でこのチームのベストゲームをすることができました。本当にありがとうございました。後輩達が全国ベスト16の壁を越え、ベスト8を達成してくれることを期待しています！今後とも男子ソフトボール部の応援をよろしくお願いします！

演劇部

部長　中村美涼

第47回全国高等学校総合文化祭（第69回全国高等学校演劇大会）は7月30日～8月1日の3日間、全国の代表12校が参加して鹿児島市民文化ホール（川商ホール）で開催されました。この大会で三刀屋高校は文化庁長官賞・優秀賞に選ばれ、目標であった国立劇場の舞台に立つことができました。鹿児島に出発する直前の7月23日には、雲南市をはじめ多くの方々にご協力いただいて壮行公演を開くことができました。この公演で見つかった課題を全国大会までに改善し、大会本番では自信をもって臨むことができました。最優秀賞には届きませんでしたが、精一杯取り組んだ舞台は満足いくもので、国立劇場につながったことは本当にうれしかったです。結果発表の時のみんなの笑顔や涙は一生忘れられない思い出となりました。

鹿児島から戻ってからは国立劇場での全国総合文化祭優秀校東京公演（8月26～27日）に向けて、みんなの気持ちを一つにして練習に取り組みました。出発の日は、舞台「ローカル線に乗って」の中の出発駅である木次駅からローカル線に乗って出発することにしました。平日の朝にもかかわらず多くの方が見送りに来て下さり、車窓から見る光景が舞台中の情景と重なって、地域の方々や木次線に見守られていることを実感しました。

高校最後の大会で国立劇場の舞台に立つことができたこと、初代国立劇場で行われる最後の優秀校東京公演の大トリを任されたこと、このメンバーで木次線への思いを全国の舞台で表現できたこと、この経験は一生の宝物です。支えてくださった方々、本当にありがとうございました。

JRC部

＊JRC部も全国大会推薦を受けていましたが、主催者都合により全国大会が開催されませんでした。